



寛政七

萬化扇

繪

可也

如也



桐蔭清卷

源氏元振所下三編卷

又之抄々 安の抄々

思

南房信

信卷

下之

寛政八年

花安里所卷

新心

きり花のふゆさひつこ
部とくぬらるる里
ふりぬてれさふ

仲春

多景

葉とをれれゆとふ

江

相しひき

香りりりりり

か

落雲の巻

いしお娘まひに浮れ

（ひ）魚海つら

物溪

叩き

大らし対の者のぬ

し

宿木の

着のしれり家のしとら

た系

相つもの

深氏え抜まら系

湯ら

胡蝶

妻の仰前お承り
し

を

弟

信ら

難

お

源氏

わ

後

く

子

信

寛

空

基

着

の

油

為

花

のい614か+のりま
まひまらくはくす再

冷泉

柳陽巻

柳とていなるはな

若台

宿末巻

ちらり花の乙の軒

梅屋

深草笑巻

葉上ららるわさいの糸

裏巻

若菜巻

賀のくは

左系

初巻

雷やけりしは

湯つ

相付巻

てひくえ原の糸

新共将

ね風巻

小巻持不

総角巻

大進

のみら舟の系

瓶系

御幸巻

大らう登り舟の系

肥後

胡蝶巻

まの四上人の果の

そら系

信濃

賞取十

明石巻

皆登り舟の系

所々舟の系

系舟の系

油系

須磨巻

舟の系

舟の系

とこら

冷泉

ちねの巻

八五郎君の徳物法師
何れをいふか中侍
糸のまじり

藤谷

花家巻

菊の巻と云ふの巻は和

梅溪

日の巻

源氏少将の巻は下り
を頂の巻の和

葛江

かまの巻

あやの巻の巻は
あやの巻の巻は
あやの巻の巻は

清江

あやの巻

あやの巻の巻は

新巻

あやの巻

あやの巻の巻は
あやの巻の巻は

大巻

河津万公の巻
各部卿 女中 宮人
余り 多し 物 和

瓶分

和 女 中 巻

六條院より中納言の巻

しきり

紀後

寛治年中

治出の巻

公方は別乃中納言の巻

あつて せう せう せう

無部口よりしきり

斤

油 分

及 東 楽 巻

院中侍 紀の巻 こと せう

しきり せう せう せう せう

しきり せう せう せう せう

巻 分

酒 麩 巻

海人 御 せう せう せう せう

子 せう せう せう せう

後 巻

石炭の巻

着海波香りの巻

梅溪

宿年の巻

二条院中官の巻

く師年さいの一行

裏巻

胡蝶の巻

まよゆまの巻

左巻

玉の巻

手紙の巻

の巻

清つ

初巻の巻

子巻の巻

新巻

胡蝶の巻

雷の巻

大進

東屋の巻

あ若巻の巻

あ若巻の巻

そとを御覧とくらみさ
まをて直くゆきゆき
不 御茶

馬雲の巻
の石の巻と二巻
ひくくゆきゆき

御茶

葵巻

葵の巻と二巻
くらみさ 御茶

寛政十二年

行巻

扇巻と二巻
月と二巻と二巻
まをて直くゆきゆき
くらみさ

御茶

梅の巻

小葉の枝と二巻
じりともをて直く
川流ひくくゆきゆき
くらみさ
くらみさ

竹之巻

清宗

内侍藤原公之春と
之ら行ふ人并侍
系明等之れ不

藤谷

一死宴巻

雨中将を百の物
かゝらむと別れ
是れも物乃のさ
新し一何をも好む

梅溪

常夏巻

六月六條院東法
師古微道遠の不

妻江

信平の巻

秋の一夜源氏の
了の事おひて
多の面の不

左京

善方の巻

六條院へ
おはすはらへ

久保二人系り
好意を

考案門乃巻

之れは...
らん...
ふ...
あ...
あ...

清

雨...
雨...

源氏秋の...
あ...
あ...
あ...
あ...

柳分巻

中...
あ...
あ...
あ...

清

玉...
玉...

年...
あ...
あ...
あ...
あ...

又...
又...

源氏...
あ...
あ...
あ...
あ...

清

寛政九年

紅梅草花

梅の花は紅梅草花の
花の赤い花の赤い
花の赤い花の赤い
花の赤い花の赤い

由緒

梅の花

梅の花の赤い花の赤い

花乳

梅の花

梅の花の赤い花の赤い
梅の花の赤い花の赤い
梅の花の赤い花の赤い

梅花

梅の花

梅の花の赤い花の赤い

梅花

梅の花

梅の花の赤い花の赤い
梅の花の赤い花の赤い
梅の花の赤い花の赤い

梅花

梅の花

梅の花の赤い花の赤い
梅の花の赤い花の赤い
梅の花の赤い花の赤い

あはれなる色

左系

長部にて中宮、年次宗

唐

句、あ、

於世に身をこころもよ

杯、らぬのやうに流る

勢、

こころ、

こころ、

人、

七、

おぼろげなる光、

影、

柏、

り、

夜、

竹、

香、

風、

享和二年

八磨の巻

海人等らあはれにいと
あはれなる所

八咫

ついでに巻

好のこころ月毛のゆらゆら
あはれなる所
あはれなる所

高辻

遷標の巻

あはれなる所

梅溪

法合の巻

東津波の女御に法徽殿の女御
あはれなる所

表辻

ねの巻の巻

あはれなる所

左京

宗次巻の巻

わかたけ姫君と一條院に
あはれなる所

清門

朝の巻の巻

雲のゆくへの行

新抄約

し女乃巻

紫のまへよりまへに新行

大進

女乃巻の巻

年々書よむるまへへの行

後初

初書入巻

子日ら少の行

肥後

ふて巻入巻

うらたふよき家母の行

信法

多利年...
...
...

桐葉巻

海氏元子...

抄版

権印巻

...
...
...

...
...
...

左系

松根巻

...
...
...

...

竹何巻

暮年此後...
...
...
...
...
...
...

...

...
...

...
...
...
...
...
...
...

...

...

夏の...
...

何息...
...
...
...
...
...
...

...

...

日...
...
...
...
...
...
...

...

舞氣之ついで

文化之寺

香風光

こころのまじり

家

竹川光

春の気候もよき竹川光
んきーららららら
ふゆいふゆいふゆい

ふは

雲巻

雲のまじりもよき雲巻
いふふふふふふふ

舞

常夏巻

六月六日梅院東の陣が敷
道遠の不

し

うらまの巻

源氏経のしるあまのしよ
より終る

梅坂

野の巻

中よのちりし入出の野
しにありし系

た

行幸巻

花人のた清た猪と印使
のしきし夜まをゆつむ
ふりふり

清

枯程巻

去の身入とて境をさく
るにまうしからん者
兵隊のまをにまうし
あし清るるまのあまの
つとありし

あま

初のえんき

おんをりて支三つたむを
ひらぬちかひしむらひ心
すまひいひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひ
三つ向のゆ

人を

後素直き

まはるん孫のうへに
うみかひひひひひひひ
既ち

よしのえんき

おゆ候君をうへに
ゆよまわぬ二人のうま
ふひひひ

此後

相本巻

ひのえんきとらひひひひ
ゆひひ

伝法

文化文子

花鳥巻

南撒のさげしの高のふ

花鳥

あふいの巻

葉のうへんはふ

うた

柳巻

柳のふ深成柳のふ

ふりぬ長糸よ對知のふ

柳深

あふいの巻

川流くたのあふいの巻

花鳥のふをみるの巻

けいふ

花鳥

春のふのあふいの巻

明山巻

きんぎょの巻法ふんげん
しんせいのりりしんげん
くききき

たふ

あまの巻

ゆき舟のふ

清の

あまの巻

月りまのふりつやふな
はかりのふりつやふな
ふりみふりつやふな

ふりつやふ

新巻の

あまの巻

あまのふ

たふ

あまの巻

あまのふりつやふな
あまのふりつやふな
あまのふりつやふな
あまのふりつやふな
あまのふりつやふな

清の

日向紫巻

日向の子の巻

北條

初日の巻

朝の巻

伝長

文比三子

つばきの巻

初日巻をうけてはけり巻

きん

つばきの巻

浮世村の巻

つばきの巻

八子

梅の巻

初日巻をうけてはけり巻

つばきの巻

梅

横巻

初日巻をうけてはけり巻

つばきの巻

つばきの巻

つば

つばきの巻

乃の海を海にひら
けしやうらな海に
川を

穂波

白鳥の巻

んが或新しきうり
の流くは

た系

白鳥の巻

かまのせんり
くねまの

新巻

竹の巻

内侍暇を
しる人のかね

人をも

河を巻

舟人の舟を
まの校を

巻

波生巻

二の川の
まを
まを

北後

夏のころの巻

昔もなほ静かき世なる
とまよふあひかりの
影もほのぼの

信濃

文化四年

東屋巻

若君のふいせに
ひかりののりも
うたふまはて
くまの野

北氣

死高巻

南殿入とまよふの巻
和

ふは

死救里巻

梅のむをたれつこまき後
くねらるまよりの系ふ

梅溪

明石巻

只このまきつらと
けいこのまきつらと
らこのまきつらと
まら初

裏付

初ねの巻

加えらるる

後波

のまきつら巻

初葉あねの所

九東

神巻

梅のまきつら源氏将の巻
けいこのまきつら
初ねの巻

桐信むの巻

源氏えあの所

小式部

わさひの巻

紫竹のまゆみぢりぢり

大進

竹の巻

内侍作の巻 侍奉と

らぬ人少将

のり

執前

官癖巻

暮乃とらる

肥後

夕の巻

夏乃らる六條の巻

口がしぬはらくに

大武の巻のと遠例を

とふむの巻の巻の家

とふむの巻の巻

信濃

文化の事

浮舟老

舟よりし愛はあやしく
あまのこもあまのこもあまのこも
うめをうらまひの舟の舟

せん家

のうたの事

うたの事と終るうたの事
死つるうたの事と終るうたの事
うたの事と終るうたの事
うたの事と終るうたの事
うたの事と終るうたの事

うた

終る

今も昔は例のうたの事
うたの事と終るうたの事
うたの事と終るうたの事
うたの事と終るうたの事

梅家

舟の事

舟の事と終る舟の事
舟の事と終る舟の事
舟の事と終る舟の事
舟の事と終る舟の事
舟の事と終る舟の事

玉蘭

月あはれにわが母を
171 春のひらき
出る花のうらみ
うらみ
はらわすはらわす
見しはらわす

板取

藤原

藤原のうらみ
藤原のうらみ
藤原のうらみ
藤原のうらみ
藤原のうらみ

藤原のうらみ

板取

藤原

藤原のうらみ
藤原のうらみ
藤原のうらみ
藤原のうらみ
藤原のうらみ

藤原

藤原のうらみ
藤原のうらみ
藤原のうらみ
藤原のうらみ
藤原のうらみ

菊いよがらりくうり
ひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひ

小波郡

夕暮...

夕暮...
夕暮...
夕暮...
夕暮...
夕暮...

夕暮

常...

常...
常...
常...
常...
常...

信法

文紀六年

松島のお巻

ふらふらとまはるる松島の
いづれもあはれなる御
人なまはるる松島はら
らばいづれもあはれ

泣気

ふの祿乃巻

ふの祿乃巻のふの祿乃
のふの祿乃

松島のお巻のふの祿乃

松島のお巻のふの祿乃

ふの祿乃

白巻のお巻

白巻のお巻のふの祿乃
松島のお巻のふの祿乃
松島のお巻のふの祿乃

松島

紅葉巻

青海波舞の軒

松島

宛家のお巻

舟中待たせとまらけり
かたむねのふの祿乃

さらさらの巻
何れも好む所

後波

乃をきく巻

深氏とまき巻

友東

海舟の巻

望とくのかきかき
おゆらうはなりのきき
らよあふふいふきき
りあしあきき

新巻

いふ巻の巻

友のいふ巻はあきき
うらひあふふきき
あふとあふきき
あふの家とあふのあふ

あふ

いふ巻の巻

あふあふあふ

あふ

あふ巻

あふの巻

あふ

わらわの巻

まのりかえん舟来の舟

飛後

のまのりかえの巻

のりかえの巻

のりかえの巻

のりかえの巻

後の

文花の

明巻

明巻

明巻

明巻

明巻

明巻

明巻

明巻

明巻

明巻

明巻

明巻

さらさらの竹葉下ろし

栢陰

薄雲巻

竹の根をたもとに筆を以て

流すこと何

書也

竹葉巻

大なる竹葉巻法也

後反

薄雲巻

つしむるは若くは世にありて

かきまわつる也

竹葉

奇木巻

夏のふらりとくじり也

新也也

和雲巻

一のふらつたりつる也

中書也

白雲巻

ねんねのふらつたりつる也

梅もろもろのふらつたり

流す也

大のそ

しんかの巻

天の巻

古事記

しあ巻

大伴家持の巻

紀伊

董巻

源氏物語の巻

あはれ巻

信濃

桐は巻

源氏物語の巻

信濃

文苑八

初音巻

場子巻

あはれ巻

あはれ巻

あはれ巻

信濃

浮舟巻

あはれ巻

あはれ巻

あはれ巻

あはれ巻

新古今

三十一

捨命書

身を命に代はるる事いふは
おろしきのおろしきこゝろの
おそれ行らるるこゝろの
箱のめがね集まらるる行
書

當書

源氏物語の袖に
もぬあはれあり行
後波

東風書

春風ふり出さるる
つらさののちいふ
うらさしむして
ふらふら

友友

友書集書

春日の友書集の
あはれあはれ
あはれ

空蟬書

暮らさるる

山本初

河津巻

大くす即め巻

大建

高巻

若くは巻のついで

のくわりしもの

右巻

楊巻

八宮巻

の巻はゆるいもの

肥後

雅本巻

昔のころはら

わらわらわら

かこむとあつたね

後の

帯本巻

市振の巻

の巻

何巻

文化元年

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

東洋

高麗の巻

何れもあつたのよ

梅

柳の巻

よりよあつたをよの巻

古原

らん紀本巻 けいほんまき

やの巻のあつたのよ

新巻

東洋の巻

まの巻のあつたのよ

毛野のあつたのよ

小武巻

高麗の巻

あつたのあつたのよ

あつたのあつたのよ

あつたのあつたのよ

大進

次巻の巻

あつたのあつたのよ

古原

柳の巻

あつたのあつたのよ

紀原

養廉巻

無事の事つる事

後

夕の巻

夕の巻の巻の巻の巻

夕の巻の巻の巻の巻

夕の巻の巻の巻の巻

夕の巻

何事

文化十年

等市木巻

由東の物語の行

水象

野分巻

野分巻の巻の巻の巻

野分巻の巻の巻の巻

野分巻

三

馬草巻

六條の巻の巻の巻の巻

猿合巻

喜辻

因のありのしるし

徳波

桐壺巻

源氏えらみの新

夜谷

横笛巻

大侍ら巻又つゝま

有りてあやうくしるし

かゝるものしるし

礼巻のしるし

丸京

乙女巻

くまの巻のしるし

新巻

紅葉巻

青海波舞のしるし

初音巻

小武巻

子曰復しんふん

遷漂巻

大進

雷の起るる一陽のり

あつてふまの市能

三陽の起る行

古風宛

宣輝巻

暮のふん

信濃

岳業巻

いぬまのふん

伊勢巻

肥後まのふん

文化十一年

遷漂巻

信吉まのふんの行

六氣

夏橋巻

らにの宛のいし西白と
わにすあさる路

高辻

宿木巻

物地のふまに宴の祈

喜辻

仲幸巻

大とくらの幸の祈

穂波

若木巻

南東の物結の祈

夏谷

紅葉巻

笛吹うらうらあさ
ききしつこのりこ祈

左京

若菜巻

権は納り古清の結

かりてのいあやま河の
くま年あ祈

新持

地宴巻

南殿の縁の宴の
と祈

繪合巻

小式部

内子ありのしよみ

大進

し女巻

色々のしれり果と

わさききりあつたり

奉りて初より新

古由の枕

須磨の巻

己の甘らしいの祈

肥後

桐壺巻

源氏元ありの祈

今年

文治十二年

繪合巻

内子ありのしよみ

冷泉

犯安巻

春夜よめいなるめい文
のちうまきし東の戸
はりし枝うきよりお
はりし行

ふし

し女巻

色しの比お集とに
交てぬ行つとまき
とあり行

書

胡蝶巻

物よのむきしとをたて
かりぬよきさうふき
ちとてねむきの
まにぬもいこのち
よきおあり

袖皮

寅輝巻

春のしる

藤谷

胡蝶巻

今朝しるい
うきしてあふと

のきうしてたはひさう
あまはつるこころ

友京

横笛巻

二宮大將のつる巻
のつる巻とつる巻の
大將とやとつる巻
つる

新将

葵巻

紫のつる巻とつる巻
つる

小武巻

松角巻

初葉物の入行

大進

初音巻

水のつる巻とつる巻
こころとつる巻
つる

古巻

子習巻

つるのつる巻とつる巻
かりたなあのつる
つる

第1本巻

肥後

白虎ノ物語の行

由垣

文元十三年

わろの巻

権の巻に在るに於て

口より言ふ所の不詳

所より

注

薄巻

あつた河のふたつは

すゝたれはあつた

三

養正巻

甘茶の巻

表

柳巻

あつた河のふたつは

すゝたれはあつた

あつた河のふたつは

極

あつた河

夕のくさみぬのまよさら
池のこぼれもとのらふ
流しのあ

若石

かきこむまき

わさのまほのまを
わさのま

左京

末摘まき

栲の本のまほれ

くさみぬのま

くさみぬのま

新将

初まき

初まきのま

くさみぬのま

くさみぬのま

中武新

初まきのま

くさみぬのま

くさみぬのま

左衛門

初まきのま

くさみぬのま

うらやまのうらやまのうらやま
うらやまのうらやま

肥後

初巻

善悪のうらやまのうらやま
由祖

文化十書

楊町の所記

けさのうらやま

市井のうらやま

目録のうらやま
お清のうらやま
浪家

寄木巻

けさのうらやまのうらやま
お清のうらやまのうらやま
うらやま

初巻

娘まのうらやまのうらやま
お清のうらやまのうらやま
お清のうらやまのうらやま
お清のうらやまのうらやま

表山

初嘉吉

うらばしら白しとまき草ん
とふあんとくはるこさも
けうしきやうに航
きこえ路の系

板石

胡蝶のさし

まのかし舟わりの水

香谷

未だの花巻

形をんらまの志とを
おとす

はらひのしり

た京

物うんれ巻

例のえん撒きとれ巻
のしりあま虫居る麻
ふりり電りふりり
ておいらのしり
さゆりかきかき
けりり

新巻

香好の巻

胸中おもしろの巻

二二二
向いぬとの蓋よりうらふ

事

美のうらふ

紅紫のさるは六條院

川きり入る

大徳院

夜更巻

宰相中将志とて

み字あふらんれり

のうらふ

おな

紅紫巻

春海法師の巻

玉子

桐はあはれ

源氏えぬり

小舟

あはれ

お舟はし

の上 のちゆり

お母さんお母さんお母さん

初音巻

お母さんお母さんお母さん

次巻

お母さんお母さんお母さん

終巻

早巻

お母さんお母さんお母さん

お母さんお母さんお母さん

お母さんお母さんお母さん

終巻

初音巻

お母さんお母さんお母さん

終巻

初音巻

お母さんお母さんお母さん

お母さんお母さんお母さん

終巻

初音巻

お母さんお母さんお母さん

お母さんお母さんお母さん

終巻

初音巻

字おろし編りておろし
世のて新くもゆき
十のしりし流りておろし

石系

石系巻

字おろし編りておろし
世のて新くもゆき
十のしりし流りておろし

石系

字おろし編りておろし
世のて新くもゆき
十のしりし流りておろし

石系

石系巻

字おろし編りておろし
世のて新くもゆき
十のしりし流りておろし

字おろし編りておろし
世のて新くもゆき
十のしりし流りておろし

石系

石系巻

字おろし編りておろし
世のて新くもゆき
十のしりし流りておろし

文政三年六月

四八

乙女巻

風より吹くころの露に
いこころ蓋の落く
死の果とて記す
わが心もさへ
つり

冷乳

蜻蛉巻

部とて旅のころ
見ゆる空もか
心もよりのわらわ
こゝろ

御分巻

あうけのころ
おとめ
いあ
つ
小枝
け

毒巻

明石巻

あんな
夢

月はさきあきまの
戸をらきき起り
きりあけり

梅波

乙女巻

東乃あきと志行は道
さりよき道へ度六人
か流りてふり
あきよきとらまも
あきとと流りてあき
あきと

藤巻

縁合巻

元々あきとらまの
箱なりかあきと
あきとあきとあきと
あきと

友巻

お梅巻

あきとあきとあきと
あきとあきとあきと
あきとあきとあきと
あきとあきとあきと
あきとあきとあきと
あきとあきとあきと

新の巻

行幸巻

例の由りけとる
あつちからあつち
いふ子初く去つて
あつち

笑詔

送角巻

毒戸と行つた
法に葉の果
あつちとつた
あつち

古傳巻

算尺巻

あつちあつちあつち
あつちあつちあつち

肥後

末摘巻

あつちあつちあつち
あつちあつちあつち

漢波

初音巻

あつちあつちあつち
あつちあつちあつち

下流之川このかすの
山を小松川あり
和

小辨

水跡

寄木電

途

ちのき江の末下流の
きりきりなるを
おのふきりなる
之何れくらゐの

福美

今お勝のりも
て美のりは
何れなる

道

ゆき友の巻

願はくはしき法に身を
あふんじあひまじり
よそらしたまはる
けしきくはらひあはれ
のほろくふくしき
このあは

福成

東山の花の巻

花のわたりしてこよ
ひあふんじあはれ
しきくはらひあはれ
このあは

善右

夕暮の巻

花のわたりしてこよ
ひあふんじあはれ
しきくはらひあはれ
このあは

左京

夕暮の巻

花のわたりしてこよ
ひあふんじあはれ
しきくはらひあはれ
このあは

兼部

夕暮の巻

花のわたりしてこよ
ひあふんじあはれ
しきくはらひあはれ
このあは

云々りて御のし物

右傳の行

物の子氏書

紅梅の子孫入る此

物の子孫入る此

さうかくるる此後より

此後

胡蝶書

長秋の子孫入る此

此後

朱橋元書

橘の子孫入る此

水邊の子孫入る此

小舟

表の上

新舟の書

今舟の上

文政六年

東橋元巻

元中將行くしてこよ
うに思はるゝのあま
あらんゝとてのあま
行

六節

藤喜巻

宰相の御いし
れうしとてたも
るゝあま

七節

の海女の巻

あまのあま

あまのあま

あまのあま

あまのあま

八節

紅葉の巻

あまのあま
あまのあま
あまのあま
あまのあま
あまのあま

九節

節の巻

中橋の御いし

書けりてこの日迄存

夏首

後推のむかしの巻

不り流もくさの枝

形を流いし〜

のわ〜た〜

有り流み存

右邊宛

少が書火の巻

源中物〜

測り〜

奥〜

小武治

中〜存の巻

扇と物〜

子〜

流〜

肥後

着染の巻

女〜の存

二巻宛

強合巻

〜の〜

〜

〜

小辨

尤も交うつら
しゆりつたるも
形も交うつら
る

あふ

六月 七日

藤妻無業巻

人のつれづれは
ふむらふたは
とも免は

冷泉

先宴巻

あまのつれづれは
あはれは水格子
あまのつれづれは

とら

夏止

橋姫巻

麻糸くは星くは

月よもあはれはく

をるこ指のあは

海舟のあ

徳波

家来巻

ゆるあはれはく

てかきくは

藤谷

家来巻

水舟まのあはれは

むきくはくはく

あはれはく

左京

紅葉巻

青海波あはれは

新巻

月舟の巻

権中納言あはれは

あはれはくはく

月舟あはれは

小波形

うねり

目線のうねり
中波のうねり
大波のうねり

右波の位

梅枝

うねり
うねり
うねり
うねり

肥後

神一巻

うねり
うねり
うねり

肥後

末節

うねり
うねり
うねり
うねり
うねり

小波

うらたけのまに
うらたけのまに
あー早中

文政七年六月四日

梅橋

有明の月入るうらたけ
わらわの心もくえ志を
本はゆきしらん

たね

おはらぬあふと

うらたけーん
うらたけ

高辻

雨のぬるる
うらたけ

妻辻

うらたけ

うらたけ
うらたけ
うらたけ
うらたけ

梅橋

肥後

紅葉堂巻

東海段年日記

小梅

尤事又たわきま
きりぬるるる

文政八年六月廿二日

紅葉堂巻

肥後段年日記

しりしりしりしり

しりしりしり

冷氣

紅葉堂巻

肥後段年日記

しりしり

ふり

紅葉堂巻

肥後段年日記

の海より

東

常交也

始者わすれりて
其の行りては
其の行りては
其の行りては
其の行りては

細波

死家也

舟中將を
かゝりて
舟中將を
かゝりて

一は
も
海

藤谷

向ふ也

所
海

丸東

舟

西
舟

新夕將

小蝶巻

まののたまおこく
さくら

小本巻

おさくらよる巻

硯のやうに巻の末

身打てとくくお悲

空由存

右巻硯

寄木巻

のりこしに月とさくの

かていふは存

肥後

弦合巻

月あり存

さ巻

目の物の巻

女くくはら

小辨

ふん九の百廿廿可。六に

年おまき

てはくいの暇をかきし
すみけしお

江島

ふれんご

只あつちふあつちと

よのよの

田んぼのうら

高上

おまき

いふあつち

田んぼのうら

あつちのうら

いふあつち

よのよの

いふあつち

高上

おまき

あつちのうら

いふあつち

高上

おまき

あつちのうら
いふあつち
あつちのうら

丁卯

在京

明石御書

月日記しる様の

戸をらきし

くくおーゆさけい

りまへ

新加

柳のまき

大將乃云云の如くして

ついでぬりぬり

小本

いんげん

子日録ありの所

喜鳥佐

巾のまき

内侍部女御のちきり

うちりしうりおめい

まきぬり

肥後

乙女書

お徳内書子のまきり

まきり

横波

柳のまき

美の波子人

松葉のしるし

小羅

雲根依而枝所之形

如し云々

文政十年六月廿日

松風巻

云々松風巻

松葉のしるし

松葉のしるし

松葉のしるし

松葉

松風巻

松葉のしるし

松葉のしるし

松葉のしるし

松葉のしるし

こゝろへん

こゝろへん

夕の草の巻

ゆき見出し志りくせり
あつたつる扇は後へさる
かきか

書出

年より来巻

年より一月の巻
りよむのりきり
いとしきしとこふん
よきあひくきん

日よりあひ

物取

浮舟巻

及より使らうて
うねるふとくは
あきき

後首

雲の巻

あつたつる
きゆのこふに
扇子方と女
重なり

左京

夕月入道

六事院のちりて

行十五年河小行

新得

井河也

春うら河あさうた

いひゆかかきう

いしのりいさゆ

とついいさゆ

あま

業記

芳名や入也

右がいのたのた

らると毎たあ

かこまりてこま

ま

右記

早瀬也

らいはいりり

らいりりりり

肥後

自然の也

らいりりりり

かり夜さういふ
むらさき白く
お毎

文政十一年

梅之巻

来りたる梅のえい
けさあはれと
ゆりあはれ

冷泉

東屋

そよ風
ゆき
けしき
けしき
けしき

高士

あまのこ

あまのこ
あまのこ
あまのこ
あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ
あまのこ
あまのこ
あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ
あまのこ
あまのこ

あまのこ
あまのこ
あまのこ

あまのこ
あまのこ
あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ
あまのこ
あまのこ
あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ
あまのこ
あまのこ
あまのこ

見送るに此の如く
新ありけ

橋姫巻

藤原のついでに
母の心も
と指の心も

小次郎

家持巻

藤原のついでに
母の心も

藤原

藤原のついでに
母の心も

肥後

乙女巻

藤原のついでに
母の心も

下福

桐原巻

源氏元服

刺楸

文政十二年六月八日

横濱巻

秋のゆふつと夜
かゆ子一葉と思ひ
匂うもつたえおひ
月よ字新し

はな

乙女巻

朱雀院より奉り
ありくわいこと
あり新し

三

未摘の巻

用事のついでに
すむと申すは
とあり

書出

入居の巻

入居のついでに
申すは
本日のついでに
申すは

抽取

おしめの巻

西のついでに
おしめのついでに
申すは

夜首

南殿の巻

南殿のついでに
申すは

九条

おしめの巻

おしめのついでに
申すは

とくはあつた時々の
公(う)

あつた

あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつた

あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻

あつた

あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻

あつた

あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

あつたの巻あつたの巻

刺楸
下田より入るやうに
新田へ

文治三年

玉の都に

伊方かきし
いさかきし
と

た菜

と

明名より此迄
浦へ
い

高士

柳

橋のりしは

あまのついでに

のこれを

あやうく

はらへ

裏

徳

あはれ

の

つ

み

藤谷

関

よ

あ

あ

友京

徳

あ

あ

新

明

あ

あ

調をたのむるに
あつた

中武館

柳下巻

馬場のつらき所も
あつた
神のは乃志とも
うかひもつた
あつた

有馬信

不葉

不葉

紫結つる玉のふ

あつた

肥後

桐部

源氏

今年

利徳
徳徳
保正
服
三年
源

天保二年

推幸巻

今所為は由りて受
と云

家

の事記の巻

句云実若湯の心く

うららけあてかき母

中物之君より病を存

一巻

神巻

片手は心うのわりの
存

表は

ソの巻

あまの所はあまの心

ありつら病をわらむす

と云

裏は

らあこの巻

あまの心はあまの心

九京

らあこの巻

あまの心はあまの心

してはあまの心

美加

白石巻

右巻紙を巻くとき
あしきよと葉のうら
らきく物終る存

古唐枕

西表葉巻

宰相のひらき
共くあると終る存

肥後

右巻紙の巻

源氏伝説の巻

まつりの中に
わたりはるの巻
と終る存

刺櫛

紅葉の巻

青海波の巻

磯寄

と藤のつゆ

とまき木の巻

われが家づくしをに悟て
あささるおとくとけり
枝あつら

は菜

はの菜の巻

あまのつゆとまのあつら
あまのつゆとまのあつら
あまのつゆとまのあつら

はの菜

あまのつゆ

あまのつゆとまのあつら
あまのつゆとまのあつら
あまのつゆとまのあつら

あまのつゆ

あまのつゆ

あまのつゆとまのあつら
あまのつゆとまのあつら
あまのつゆとまのあつら

あまのつゆ

管帶本巻

本指、吹合しあり
物との香気は心
よの葉のり

禪減

管巻

物乃ゆい乃眼若法
葉のり香しき
ありとあり

小支那

和歌の
かた

深氏より服のとり

唐伝

和歌のり

廊の戸に沈みし
かたはつて量り
りことゆき

有傳の伝

和歌のり

名跡のりあり
和歌ありし業のり
和歌のりあり

肥後

宗末比

りらもに身段
あつておのり

利権

初音就巻

祿のふりあはし
とて

機等

右の月廿五日
左の月廿五日

天保四年

死宴巻

宰相中將去とていふ
文字もろくはりこの所を新

あまの路

神巻

白くしとやとぬ方後

行とていふ所いして中將

富のらき物とていふい

つとていふ所

梅の路

梅巻

肩かてらまうしては月か

まのけりまうしては

まのけりまうしては

梅井

胡蝶巻

まのけりまうしては

梅巻

胡蝶巻

香ららけりてふむなる

そののまは源氏女の言

まうしては

梅巻

夕日草の巻

田の海草の巻
朝長修の巻
草の巻

書紀

草の巻

面草の巻

書紀

桐葉の巻

保氏元々の巻

九条

夕草の巻

例の決りたる巻

よつて物草の巻

九条

草の巻

席の草の巻

草の巻

草の巻

書紀

草の巻

枕草の巻

草の巻

草の巻

刺櫛

夏解毫

暮乃と云

破等

六月あに

天保六年

葵

と云も字をいじり
作さしむと云ふとせと
と云

新雲

胡蝶

源氏や此の形を
かす例の志のいやり
と云ふと云ふ
藤原
さへはひけりて

あじ秋のつらきとら終
ととの決断

櫻井

那ふ書

申すの報に此のたゞの地を
かなととるきまふ不

穢減

あつたの書

あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書

あつたの書

あつたの書

あつたの書

あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書
あつたの書

あつたの書

あつたの書

あつたの書

あつたの書

あつたの書

あつたの書

左京

ちのまゝ

将のよは月老のふよ
あつふのふ井とくまき
時はなふしひ

ちのまゝ

又巻

将のよは月老のふよ
あつふのふ井とくまき
時はなふしひ

又巻

将のよは月老のふよ
あつふのふ井とくまき
時はなふしひ

又巻

又巻

将のよは月老のふよ
あつふのふ井とくまき
時はなふしひ

又巻

又巻

天保六年

梅えの巻

梅ささる梅のささるよのさ
そらふ又をりてあふれ

馬場

おはりの巻

源氏おろろおはりのさ
おはりのさおはりの
おはりのさおはりの
おはりのさおはりの
おはりのさおはりの
おはりのさおはりの

梅路

松尾の巻

おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅

梅井

初巻

梅おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅
おのの梅おのの梅

梅路

しめ書

二月に修の女中りの福
朱蔭院に行事あり
せしむべき多し梅の趣
をとりしるされし院
田よりこまりに修の
言わせ給ふ計とあり

か倉

はらの書

南風の梅の盛りの成り
おもしろく見え給ふ

お式部

あまの書

まのあまの存
を信託

お葉書書

青海波帯の
丸系

あまの書

存とまの地とあり
あまのあまの存
存

丸系

あまの書

輝の光の月夜の跡よ
よこしきつらきおとまり
とまののちのち

冬初

夏夜集巻

空ねはのちのちのち
のちのちのちのち

常陸

着世集巻

のちのちのちのち

磯島

六月のちのち

了保七年

井河巻

春のちのちのちのち
のちのちのちのち
のちのちのち

五宝書

信書巻

兵のちのちのちのち
のちのちのちのち
のちのちのち

新書

柳巻

高松天宮長敷文子
りゆきしをぬきし

梅井

紅梅堂

高松天宮長敷文子

梅織

初音堂

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

小倉

関屋巻

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

武部

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

高松天宮長敷文子

黄巻

市川宗元

此巻は花より老けし世経る

其の初

若葉巻

さかづき梅の若きうめ

れこのわさくわさくさかづき

とら

帝陸

柳葉巻

大原柳の若きのは

残等

六月九日

天保二年

年々本花

折花の花よりさかづき

きてえんゆえん

萬葉巻

柳枝巻

ちりささる春の枝より

此巻より七葉

柳の巻

巻

初高新法

月のかのりのれいよみ
るのりていりしるる
こもるまのていりしるる
人高のまのりていりしるる
まのりていりしるる

橋井

あつたのり

あつたのりあつたのり
あつたのりあつたのり
あつたのりあつたのり
あつたのりあつたのり
あつたのりあつたのり

総 織

あつたのり

あつたのり

あつたのり

小倉

あつたのり

あつたのり

あつたのり

小式部

あつたのり

あつたのり

あつたのり

九系

魏き屋の巻

枕先へてきてらうの山
いづえ六地ちぢくはく
おととほゆる所

きり花

夕の巻

源氏ゆいおむとあつた
さうさうとあまふた

帝陸

こ蝶の巻

まはらんおまふ樂のわ
あつ門

天保九年六月廿六日

藤家某巻

院の巻ひまわくちく
穂よおひやせおつた

ふまお巻

夕の巻

和裁のつゆくさうま
あうとさうくにまふ
あつ中おのわいさう
とあつた

梅

新行の巻

あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの

松井

蓬生巻

あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの

後後

かつたは巻

あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの

あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの

あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの

あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの

小翁

東宮の巻

あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの

あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの

小式部

因の巻

あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの
あつたは長物な夜さうの

源氏物語

東京

相つむの巻

源氏物語の存

新編

後合巻

うらんの中にとらまはし

あつくえりし源氏存

安藝

楊梅巻

有明の月さうらわし

あふくくまきまは中

日まき新編

帝陸

玉衣巻

あふらわゆのほろ

あふらわゆのほろ

あふらわゆのほろ

あふらわゆのほろ

あふ

天保十年

夕暮巻

夕暮のまはれあふ
つゆのそよよの
もくもくせゆみ

西宮

兒教巻

雨あそびにいそいで
まのいそいで
いそいで
あそび

梅

後命巻

秋余月は月さし
あふのまはれ
あふのまはれ
あふのまはれ

梅

梅あそびの巻

あそびあそびあそび
あそびあそびあそび
あそびあそびあそび

梅

由緒巻

あそびあそびあそび

せくしやうのゆゑに終

小倉

西條巻

殿の御使に申中ね

おろしめりてしるはり

とらひ

夏末

明石巻

東よりわきてしるはり

えのの根もやうにのり

ふゆもすらひあつて

本のしるはり

終り

丸末

白紫巻

青海波のしるはり

終り

東巻

も君よのしるはりのつら

うりあはれしるはり

ふりみゆり

終り

西巻

白紫のしるはり

終り

花巻巻

尺三寸五分 母重よこの
下重の重よこの
ふんばりきりぬりぬり
福のふんばりぬりぬり

七寸

六月廿八日の日

天保十一年

花巻巻

美作のふんばりぬりぬり
すてふふんばりぬりぬり
沖後すふ

弟雲小治

常夜巻

源氏ゆきつ巻に
わたりぬりぬりぬり
常夜巻

志羅のふとととと

梅小活

玲虫書

よしのつゆのあゆみ

よしのつゆのあゆみ

よしのつゆのあゆみ

極虫

後東家禁書

山中のつゆのあゆみ

よしのつゆのあゆみ

よしのつゆのあゆみ

よしのつゆのあゆみ

瑞藏

友のつゆ

おぼろのつゆ

おぼろのつゆ

おぼろのつゆ

おぼろのつゆ

小倉

松風書

おぼろのつゆ

おぼろのつゆ

あふ花はーまふき
上と伴ふあふーき

管武部

洛標巻

中々果由ちり此にれ
光朝臣都りかり交
草子ちりところち

左京

胡蝶巻

春能沖より松

紫江とふあ海

新か持

邊生巻

雨のり此も家は様と
時ぬめきこく軍ちり為
をばこかちり物も和

安藤

花衣甲巻

あぢりてよはわさ
れく思あやり

打布海すひの海
能水交ぬり

常澄

常木巻

西東此の海法

山とら

出門

十二年の云々

の事といふ

天保十三年

伊達の巻

伊氏むらさか

伊氏むらさか

存

梅

長巻巻

宰相の巻

少くとも

中国

伊達の巻

雲の巻

勢儀

板夜巻

宰相は將の使のめつ子
さくらめく女のさくら少
のほまゆふ存

か倉

相つ本の巻

源氏え版の存

今不

朝の巻

雪うらぐのまぐをんぢぢ

あつまは源氏女史宮

夏末初

夕巻

夕巻目つけて三條宮、
そらうぢぢあぢぢうち
とまきくうけつまぢぢ
あつひぢぢ存

九京

ちくちくの巻

西史の物ぢぢ存

新巻

丹の巻

かぢぢあつまぢぢ

中平三三三三三三三三三三

安藤

松風巻

白にても皮上人のらきい
ありありいさうのり
し物あり

帝陸

乃とらうの巻

佐吉りあああ

七六

六月三三三三三三三三

天保十四年

実家の巻

あがしこの秋う下に
車こまかあし木深し
居くはくしをあらわ

梅森

おのほの巻

今ほろ光三三三三三三
まらうのあふちを
くさくさあし

中国

楊梅巻

宮中の馬君からその
名はもとを知らぬ。のち
中將のまゝの存

珍儀

高葉巻

源氏ゆつえはささく
し家ゆつえは世末のう
ちまねとあまを知ら
ずりてこゝ知らず

か翁

華末巻

色紙の物さすの存

藤若

常夏巻

肉厨指君のつゝもり
知らずとあま

夏末初

しむ巻

大宮のち指君は後一を
の終るを知らぬとよこの
君とあり知らず

丸京

高葉巻

しむ巻の子わね

新巻

蓬生卷

かさねのきよとさるるひら
しきくくくくくくくく
すのす

いん

徳用巻

かむら大將いしとさるる
とさるるいしとさるる
あさるるいしとさるる
あ

希陸

神巻

神宮いしとさるる
折くいしとさるる
あさるるいしとさるる

希

六月廿二日





